

## プレイヤー用情報

夜はまだこれからだ。あなた達のパーティはお気に入りの酒場に親しく集い、食事し、飲み、語らい合っていた。

あなたが食事している間に酒場は満員になり、楽しみにざわめいている。2人の人物が人々を押し分けて来てあなた達のテーブルの前に立った。老人と若い女であった。

老人は背が高く高価な服を着ており、鷹のような灰色の髪と髭を持ち、片足を引きずっている。彼は姿勢が良く、年取った軍人の様に思える。

若い女は平均的な背丈の黒髪で、簡素な明るい青色のローブを着ている。彼女はまた肩に徒弟の徽章を付けている(スペキュラルムの魔術師ギルドのもの)。彼女は左腕を包帯で吊っており、額にヘアバンドの様に結ばれた包帯を巻いている。

2人とも緊張しており、心配事がある様に見える。

老人はあなた達の名前を1人ずつ呼びかけて確認し、尋ねる。「ご一緒してもよろしいか？重要な話があるのです。多くの生命が危機に危機に瀕しています。そして僕はあなた方の助けを非常に必要としります」

彼はまず若い女性を座らせ、それから自分自身が席に付いた。「僕はテラノンと申します。昔、僕はモンスターを殺し、善を支持するために駆け回っていました。多分あなた方は僕について聞いたことがあるのではないだろうか」(聞いたことはない)「僕の息子はこのごろ同じことをしります。あなた方は息子を知っているかもしれません。名前はレタメロンといいます」

「今や、あなた方はその名前を知りました。レタメロンは冒険者で、カラミーコスでも最も名を知られた戦士の1人です。あなた方の様に、レタメロンは邪悪な混沌の勢力と戦う事によって武名を高めました。最後に、数年前、息子はハリアという名のマジックユーザーと結婚してこの辺りで落ち着きました。息子は戦士の団を雇い、ステファン・カラミーコス公爵と高潔な大司教からの大小の使命を果たしていました」

「あなた方はスカルダの襲撃隊について聞いたことがありますか？」とテラノンが尋ねた。「聞いたことのない方のために説明しましょう—これはとても長い話です。ここ何年もの間、スカルダという名のマジックユーザーがカラミーコスや周辺国の辺境地帯を脅かしてきました。奴らは追従者の団—手強い騎兵達—を率いています。奴らは町を襲撃し... どういうわけか誰もわかりませんが、町の住人全員を誘拐し、全ての家畜を奪い、部下の運ぶことのできる全ての宝物を強奪します。

そして—これこそが厄介なことなのですが—奴らが捕まることは決してありませんでした。奴らの1人でさえ。奴らの内1人が負けると、残りの者達は彼を軍あるいは公爵の警備隊の手に落とすよりはむしろどめを刺そうとします。奴らの痕跡を追跡する者はいつも途中で跡を見失います。痕跡はある地点に達するまで少しうろついた形跡があります。しかしそこから先には続いたりません。奴らは決して捕らえられず、誘拐された人々は決して取り戻されたり身代金で解放されたりはせず、家畜は決して戻ってはこず、宝物は決して見いだされることはありませんでした。スカルダの顔は決して目撃されませんでした」

「ああ、およそ2年前、我が息子レタメロンと嫁は、僕を訪問するためにスペキュラルムに帰って来ました。息子は少しの間飲んで騒ぐために外出し、酒場で醜い男を目撃しました。そいつは見た目からするとオークの合の子かも知れず、レタメロンの知っている装飾品を1つ身に付けていました。それは息子の知っている婦人が持っていたブローチで、彼女は1・2年前にスカルダに襲われて消え去った村に住んでいました。彼女と彼女の召使い達、そして全ての所持品はもちろん見つかりませんでした—その夜、レタメロンがブローチを見るまでは」

「息子は馬鹿ではありませんでした。その男をいきなり問い詰めたりはせず、数時間後待ち、酔った男が出て行く後をつけました」

「男はまっすぐマレックの家に行きました。マレックは地元の魔術師ギルドの高位のメンバーであるマジックユーザーで好人物と言われており、いつも街のために進んで何かをしようとする男でした。そこで判ったことは、酔った男はマレック個人の護衛であるということでした。それは息子の好奇心を刺激しました。それで息子は嫁と知合いの冒険者数人と共に、その夜の明け方にマレックの家に侵入しました」

「彼らはマレックと彼の副官がステファン公爵に対して何らかの種類の反乱を企てているのを目撃しました。さらに彼らはマレックこそがスカルダであることも発見しました」

「とにかく、彼らは脱出する前に発見され、大混乱が発生しました。その晩は街中で剣戟が交わされ、ファイアーボールが飛び交いました... スカルダの手下の何人かと息子の良い友人の幾人かがその夜死にしました。戦闘が終了した時、スカルダは全ての呪文を使い果たし、炎上する家に閉じ込められ、そこで死にました。少なくとも我々はそう考えました」

「公爵の警備隊はマレックの、そしてスカルダの家の残骸を調査し、無傷の金庫からレタメロンの話を裏付けるのに十分な書類を発見しました。彼らは同じくその鏡を発見しました。あなた方はライフトラッピングミラーをご存じですか？その1つです。レタメロンの友人の1人が警備隊より先にそれを発見しました。そのため誰もそれに引き込まれずに済みました。レタメロンは後に役立つこともあると思いそれを保管しました。スカルダの襲撃隊による攻撃はその夜以降なくなり、世界に正義は取り戻されました」

「さて、1週間前に、レタメロンが監獄に入れた誰かが息子に脅迫を始め、そして脱獄しました。レタメロンは安全のために、ライフトラッピングミラーの埃を払い、夜間の彼の寝室のドアにホールに向けてそれをかけることにしました。もちろん息子は召使い達に、夜間は決してホールに入らないように厳しく命じました。しかし、それは初日に起こりました」

「ここにいるのはアンドリヤです。彼女はハリアの弟子の1人です。その夜実際に現場にいたので、残りは彼女から話します」

アンドリヤはあなた達を見回すとせき払いして話し始める準備をする。彼女は沈痛な声で話をする。そのため彼女の話が幸せな結末を迎えないであろうことは明白である。

「それがどの様に始まったかは誰にもわかりません。私の推測ですが、それは真夜中を過ぎた頃だったと思います。誰もが眠っていて... それから外で誰かが絶叫していました。私は後に何らかのモンスターがホールに出現していた事を見ました。先生(ハリア)は叫んでいました。『彼は行ってしまった。レタメロンは鏡の中に行ってしまった!』そこで先生は悲鳴を上げ急に途切れました。モンスターは先生に殺されていました」

「我々は全員廊下に飛び出しました。私とセラ—もう1人の弟子—、ハリア婦人、クレグとノーリン—レタメロン卿の2人の従者—、塔の書記と下の階の兵士達...そして最上階のホールには何らかのモンスターがいました。それは人間大のヒビの形で、黒い毛皮とクマ捕り罠のような牙を持っていました。我々は直ちにハリア婦人を追いました。しかし婦人とクレグとノーリンは皆が集まるまでモンスターを引きつけました。それがノーリンを殺しました。婦人はモンスターが死ぬまで攻撃を続けました」

「我々は鏡に布をかぶせ、ハリア婦人はレタメロン卿を呼び出そうとしました。しかし婦人は卿から返事を受けることができませんでした。それ